水を飲む

眠りが浅いのが、妹子の悪癖だった。
空気の揺れを悟って暗闇の中、太子は目を開く。掬い上げられたような自然さで、覚醒した意識が隣人の不在を告げる。
仰向けのまましばらく、微動だにせず、太子は見えない天井を見ていた。黒い。暗い。目を開けているか閉じているのか、曖昧に溶けていく冷たい空気。
かすかな足音を耳が捉える。ぺたりと軽い足音が胸の内を痛くさせる。
どうしてこんなになるのか、未だ、太子は答えを持っていなかった。
ただ胸の内側が苦しくなる。甘く締め付けられるように、無視しようと思えばできる程度に、かすかな痛みが主張する。
追いかけないといけない気がして、太子は布団を跳ねのけた。
予想通り、それ以上の冷気があっという間にまとわりついて、なおのこと焦りが体に満ちる。
感じる温度はいっしょだろうと、自惚れようとしたかった。

水の流れる音がする。
流しで、もこもこしたカーディガンを羽織った妹子はコップを両手で持っていた。中身は透明だった。コップの底からは水滴が落ちていった。
太子を見た途端、妹子はばつが悪そうに顔をしかめた。
「起こしちゃいましたか」
声は硬い。まるで拒絶されているような心地になって身震いする。
何を勘違いしたのか妹子は一度コップを置いて、カーディガンを脱ごうとするものだからいっそう太子は慌てる。
「大丈夫、大丈夫だから！」
「でも」

放っておくと無理矢理にでも着せてきそうなので、急いで太子は部屋に取って返し、投げ捨ててあった綿入りの半纏をかぶって流しに戻った。
これでいいだろうと言わんばかりに、腕を広げてみせたけど、妹子は呆れたため息をひとつくれただけだった。
「もっと褒めてくれてもいいんだけど」
「いい子はとっくにおねむの時間ですよ」
「私もうとっくにいい大人なんだけど」
「今何時かわかります？」
「ちゅーしても良い時間？」
「ぶちますよ」
「ごめん、そういう趣味はちょっと」
「僕にだってありませんよ。もう、あんまさせないでください。くせになったらどうしてくれるんですか」
「どうしようね。責任とろっか？」
「どうやって」
「ちゅーしていい？」
「ぶちますよ？」
「そういう趣味はちょっと……」
「早く布団に戻ってください。眠れるでしょう？　あんたなら」
「妹子は？」
「もうちょっと、待ちます。ここで」
「いっしょにいてもいい？」
「あんたには寝ててほしいんだけど」
「妹子といっしょじゃないと嫌だ」
「わがまま」
「いいじゃん、別に」
「あんまり困らせないでください。わかるでしょ？」
「わかんない。教えてくれなきゃわかんない」
「あんまり手間をかけさせるな。ねえ、あんまり強い言葉を使わせないでください」
わかるでしょう、と妹子は、言う。
だいたいどんな妹子だって太子は好きだったけど、この妹子は、いただけないなって、思ってもいる。
気遣いだか何だかわからないけれども、嫌なものは嫌なのだ。
そりゃ、太子だって、眠たかった。今だってこんなに寒いのに、瞼がくっつきそうになってくる。
それをじっと妹子に見られている。
でも嫌なものは、嫌なのだ。
眠れない夜を妹子がひとりで過ごすくらいなら、頭痛がするほどの寝不足の方がまだましなのだ。
ひとりとひとりはいやなのだ。
せっかく二人でいるのだから、出来るだけ二人でいたいのだ。
なんで妹子はそれをわかってくれないんだろって、時々、つらくなる。
それが余計妹子を苛立たせたり追いつめたりすることさえわかっていて、どうすることもできないようだった。
「私にもお水一杯ちょうだいよ。一杯、それでいいから。それだけ飲んだら戻るから」
妹子はじっと太子を見ている。
どうせ太子の思惑なんてお見通しなのだろう。
それを確かめるように、わかっているんだぞと脅しかけるよ

うに無言でひたすら睨まれて、だけど太子だって一歩も退かない。
しんしんと寒さばかりが降り積もる、夜が降りている。
流しの上の明かりひとつで、ぼんやりと照らされた部分ばかりが世界のすべてで、それ以外それ以上は何も無いみたいだ。
世界がここにしかないみたいだ。
二人がいる外側には何もなくて、世界は閉じていて、太子はそれでいいと思っている。
妹子はそう思っていない気がする。
でも太子は確かめたくもなくて、ただ退けない想いで睨んでくる妹子の視線を受け止める。
時間は止まるように思えて、立ち止まらない。
きっと妹子には聞こえていない、どこか遠くの部屋の時計の針の音を、太子はもういくつも数えている。

何も履かない足の指先が感覚を失くしていく。
ため息には苛立ちが込められていて、だけど妹子は棚からガラスのコップをひとつ掴み、蛇口をひねった。
水音がする。溢れた水が妹子の手を濡らす。
一度口を寄せて中身を飲んで減らしてから、妹子は太子にコップを差し出した。
七分目まで満たされた水がたぷりたぷりと揺れている。
塗れたコップはとても冷たく、喉を滑り落ちる水も冷たかった。
太子はコップを両手で抱え持って、妹子のすぐ隣に並ぶ。

妹子はぼんやりした目でコップの水の表面を眺めて、うなだれている。

コツコツとどこか遠くの部屋で時計の針の音がする。
太子は水をちびりちびりとなめながら、いつかでいい、今じゃなくていい、妹子に通じてほしい思いを、ひとつふたつと数え始めた。